

# 1章 「観点をもつ」

1章では、子どもが主体的に遊ぶ姿から、主題に繋がる体験や育ちを見逃すことなく捉えて明らかに示すことを大切に、このために必要となる「観点をもつ」に焦点を当てた事例を紹介します。『科学する心を育てる』をどのように考え「子どもの姿を捉えるためにどのような観点をもち」「どのように実践したのか」「どのように共有したのか」を整理することは、今後の幼児教育に求められる「カリキュラム・マネジメント」の実践にも繋がります。



## 1. 観点をもつために

### ① 子どもの姿をよく観る

本園は「もっとおもしろく」で広がる遊びの世界」を研究テーマとし、子どもたちが主体的に人、もの、ことに関わり、「もう1回」「もっとやってみよう」という意欲をもって遊び込む中で、「主体性と創造的な思考力を培う保育」の研究を進めている。子どもたちの発想を大切にされた保育を重視し、子どもたちが主体的に人、もの、ことに関わり、試行錯誤して遊ぶことが「科学する心」にどのように繋がるかを追求してきた。  
[参考事例 P.34] 奈良市立都跡こども園

### ② 「科学する心」が育まれる子どもの姿や体験を明らかにする

子どもたちは、身の回りの多種多様な環境から、目に見えるものも見えないものも五感を通して全身で感じとり、そこから「なぜだろう?」という疑問が湧き、「やってみよう」という意欲が生まれ、その実現のために自分で手立てを考え(想像力・創造力)、考えたことを試してみる(行動力)。この一連の流れを支える力が、本園の考える「科学する心」である。そして、子どもたちは、得られた結果から喜び、驚き、困惑などを伴った気づきを経験し、これまでとは異なる視点での見方、視野の広がり、新たな発想、さらなる探求心といった成果を生みだしていく過程が「科学する心」の育ちであると考えている。

さらに、友達や保育者、家族との豊かな体験の共有により、「科学する心」は深まり、広がり、育まれる。そして、子ども自身が、様々な体験を通して身の回りの人間関係を実感し、「多くの人々や社会の中で生きていること」「自分たちは支えられて生きていること」に気付くことができる。様々な人や社会と繋がる体験による新たな発見を通して育まれる「感謝する心」や「思いやりの心」まで含めて、今回の取り組みでは「科学する心」と捉えたい。

「科学する心」が芽生えるきっかけは、子どもたちの日々の生活のいたるところに隠れている。このきっかけに気付けるかどうかの基盤となるのは「感性」であり、豊かな感性は、五感を通じた人的・物的環境との関わりを繰り返し経験する中で育まれると考える。 [参考事例 P.12]

社会福祉法人顕真会 よいこのもり幼保連携型認定こども園・よいこのもり第2幼保連携型認定こども園

### ③ 「科学する心」と園のテーマを結び付けて、「科学する心」が育まれる幼児像を考える

本園は、子どもたちが心を動かし、夢中になって遊ぶ中でこそ、「科学する心」が育まれていくと考える。これまでの研究で、「自ら環境に関わり夢中になって遊ぶ」をテーマに、エピソードを記述して考察した。その中で、夢中になるということを年齢ごとに次のように捉えた。

- 3歳児 したい遊びがはっきりし、これがしたいと強い思いをもって遊ぶこと
- 4歳児 大好きな友達と一緒に思いを出し合いながら遊ぶこと
- 5歳児 友達と一緒に共通の目的をもって遊ぶこと

さらに夢中になって遊ぶためには、子どもたちが人との関わりを、保育者から大好きな友達へ、そして学級や学年のみんなへと広げながら、「思いを出す」「向き合う」「つながる」経験を繰り返していくことの大切さが明らかになった。私たちは、このような人との関わりの中で夢中になって遊ぶことによって育まれる「科学する心」を次のように捉える。

- どんな思いも受け止めてもらえる安心感から育まれる好奇心
- 大好きな友達との関わりの中で、共に考え・作り出していく楽しさの体験
- 仲間と共に身の回りの出来事に驚き、感動し、想像する心

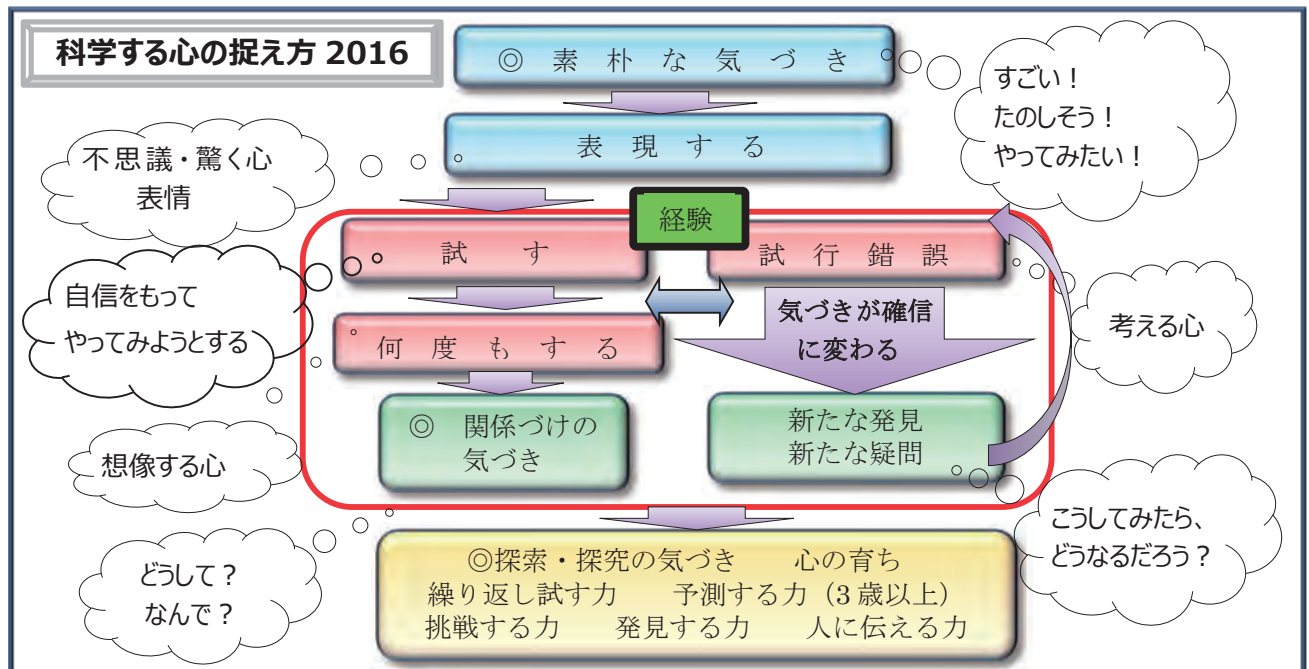
子どもたちが人と関わり、夢中になって遊ぶ姿を捉えた事例から、どのような経験が「科学する心」を育てていくのかを、「思いを出す」「向き合う」「つながる」の視点で考察する。 [参考事例 P.8] 京都市立中京もえぎ幼稚園



## 2. 観点を共有するために

### ①「科学する心」が育まれる子どもの姿や体験を園全体で共有する

「科学する心を育てる」保育の構造を図に示して、キーワードや子どもの姿を共有しやすくする。



※この表は、2011年に作成したものを、園内研修にて職員間でバージョンアップさせたものである。  
社会福祉法人ゆずり葉会 幼保連携型認定こども園 深井こども園

### ②記録を生かし、「科学する心」が育まれる子どもの姿や体験を明らかにして、園全体で共有する

観点を生かして事例の記述を工夫し、事例の分析・考察の共有を図る。

事例：またカエルがやってきた！

観点：環境構成 きになるたね やってみる きっかけ・広がり

5月中旬、2組のAさんが休日に捕まえたカエル（緑：6匹、茶：大1匹・小1匹）を持ってくる。この日から3日間、5歳児組では噂が飛び交い、大きな話題になった。興味のある子どもたちが2組に見に行き、「本当にカエルいた！」「大きいのと緑のとたくさんいた！」と報告する。段々と興味が高まり、1組・3組ともに「カエル飼いたいなあ」と話題になる。

後日、1組は「カエル貸して」、3組は「1匹でいいからください」と2組にお願いをしに行くことになった。

保育者の思い

子ども同士のやりとりから、2組Aくんが持ってきたカエルを、「年長組のカエル」として全員が納得して、飼育できるようにしたい。

【考察】「Aくんと友達だから聞いてみる」「私も2組に友達いるから聞いてみる」と直接友達に伝えようとする1組と、「1匹でいいからくださいってお願いするのはどう？」と、2組のことを考えてクラス全体で提案しようとする3組。それぞれのクラスに、昨年、カエルを飼育していたクラスの子どもがいることと、「カエルを間近で見たい」という興味とが相まって、飼育への欲求が高まっている様子が見えてくる。

学校法人くるみ学園 認定こども園 くるみ幼稚園



このように、本事例集に掲載している園は、園の実態に応じた様々な方法で「科学する心」を捉える観点をもち、保育者間で共有できるように工夫をしています。「科学する心」についての考え方や、考察する観点などは園によって様々で、園独自の教育の特徴が表れています。

次に、観点を明らかにすることで、注目する子どもの姿を見取り、主題に沿った考察をすることに繋がった2園の実践を紹介します。